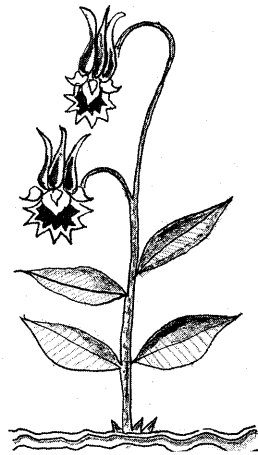


特集へ生まれる▽

ことばと生命いのちと人生と

生まれながらに

原口 庄輔



「生まれる」という表現は実に面白い性質をもっている。英語では bear (生む) の受け身形を用いて、be born というようなことは、かつて英語の授業で習った。「(子)を(生む)」ということは、女性の特権であり、主語には女性しかねない。したがって、John bore twins. (ジョンは双子を生んだ) というのを耳にしたとすると、「そんな馬鹿な」とか、「Joan (女性の名) の聞き間違いではないか」などと思うはずである。

英語では、女性が子を生むときには、bear を用い、男性が子をもうけるときには、beget を用いて区別をする。事情は日本語でも似ており、「子を生む」のは女性であり、男性は「子を生む」ことはできないので、せいぜい「子をもうける」などと言うか別の表現を用いる。ところが、ある英和辞書の beget の項を見ていたところ、Abraham beget Isaac. (アブラハム、イサクを生めりへ『聖』マタイ伝 1:2) とあるのを見て驚い

た。他の聖書はどうかと思ひ、手元にある聖書を二冊ほどひもといて見たが、あいにく、文語の聖書はない。一冊は「アブラハムはイサクの父であった」となっており、もう一冊は、「アブラハムがイサクが生まれた」となっている。聖書によって、訳文に違いはあるが、「アブラハムがイサクを生んだ」式の訳は他にはあまりなさそうであり、例の英和辞書の訳文も改めた方が良さそうである。

日本語の「生まれる」は自発の意味の「あれる (are-ru)」が「生む (um-)」に付加されて導きだされたものである。人間の一生は、生・育・死からなっており、それらはほぼ次の(1)に示すような関係になっている。つまり、「生む」に対応する「生まれる」は自発であるのに対し、「死ぬ」に対応する「死なれる」は被害の受け身である。ところが、「育つ」に対応する「育たれる」とは通例は言わない。しかし、例えば文脈上の理由で、「(犬が大きく育たないように酒を飲ませたのに、大きく)育たれてしまい、弱った」のような言い方をすれば、それは被害の受け身の解釈になる。

(1)

生む——生まれる (自発)

育てられる (可能・受け身) —— 育てる —— 育つ —— 育たれる??

死ぬ——死なれる (被害の受け身)

「生命力」は、あらゆる生命体に備わっている、想像を絶する大きな潜在能力であり、その偉大さは、野沢重雄氏がハイポニカによって育てたトマトの巨木が示すとおりである。赤ん坊が言語を習得する能力も、人間に与えられた素晴らしい能力であり、人間にはまさに一を聞いて十を知る以上の言語能力が備わっている。また、人は必ず一つは優れた才能を持って生まれてきている。芸術・工芸・スポーツ・武道・学問・実業のいずれであれ、どれか一つは傑出する才能が潜在的に与えられている。惜しいことに、かなり多くの人が、自分の才能に気がつかないため、それをのばすことなく一生を終える。これは、人としてこの世に生まれたのに、残念極まりないことである。

(2)にあげた三つの宝も、そのままでは十分ではなく、それらを強化し、大きく開花させるためには、「磨く」ことが不可欠である。いかに素晴らしい才能をもっている、日頃の努力と鍛練によってそれを磨かなければ、実を結ぶことなく、埋もれたままで終わってしまう。言葉の力も、磨かなければ、人を感動させ、幸せにする言葉の達人にはなれない。生命力も磨かなければ、それを強化し、いかなる困難にも負けない生命力に溢れた人物にはならない。

愛と感動する心を大切にし、生まれながらの素晴らしい三つの宝を、工夫と努力によって、磨きに磨いて、自ら光輝く宝となり、共に力を合わせて、我々の社会をこの世の理想郷に徐々に近づけてゆきたい、これが年来の夢である。